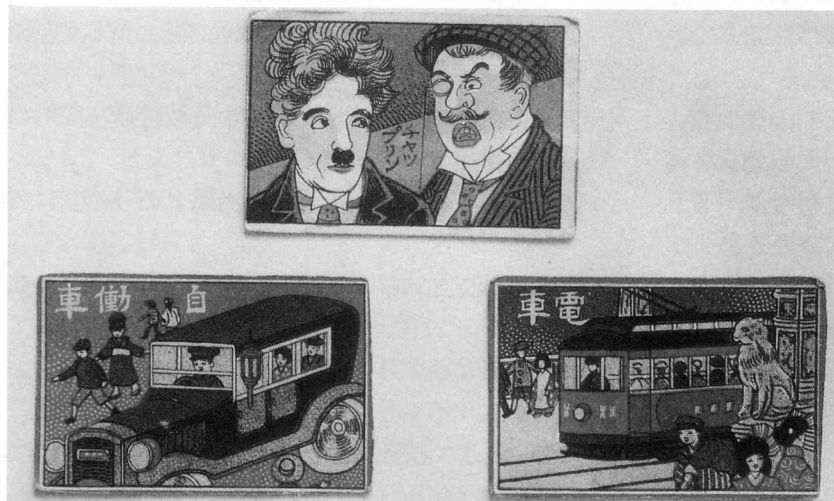


資料館だより

平成12年(2000)
8月1日

編集・発行 武蔵村山市立歴史民俗資料館 〒208-0004 武蔵村山市本町5-21-1 TEL 042(560)6620



昭和10年代のメンコ

昭和30年代～昭和40年代の
メンコ



昭和50年代のメンコ

借用資料展

進藤コレクションのメンコ

期間 平成12年(2000)7月23日(日)～9月3日(日)

指田日記に見る武蔵村山の火災 (2)

前北多摩西部消防署長 吉澤 一彦

(前号から続く)

3 火災の原因と被害の状況

火災の原因について当時も恐らく村民の関心は強かったのではないかと考えます。火災の原因を明らかに記述しているものは少ないのですが、特に不審火については記述があり、村として火の番や見回りを行うとの対応の姿が見えます。現代(平成9年)も火災の38.4%は放火であります。

住宅からの出火が多く一度燃えだすと大きな火災になっています。初期の消火手段や用具が不十分であり、加えて建物構造がすこぶる燃え易いことなどから類焼することも多かったのではないかと考えます。特に屋根の材料が茅葺きでその危険が多かったようです。勿論現在の東京で茅葺き屋根は特別なものを除き法的にも許されてはいません。また、強風が原因の飛び火火災の多いことも見て取れます。当然、一つの火災でも多くの家屋が被害にあい、その損害も少なくなかったであろうと思います。

当時の村民の生活が農業を中心としたもので、山や畑以外の農作業を住まいの中、或いは收農小屋と呼ぶ場所で行うことが日常のことであったと思われます。例えば、お茶作り、養蚕、自分で焼いた炭の収納、取り灰、収穫物の格納など、收農小屋からの出火が目立つのはこうした理由であろうと思います。取り灰は外見では火の気を感じませんが、^{まと}纏めて^{むしろ}筵やカマスなどに入れておいて出火することは、つい最近まで我々が経験する火災の原因の一つであります。

落雷が火災の原因になることは今でも普通に見られます。特に電気のある生活の現在の方がその危険性が高いと言えましょう。江戸時代は電気がなかったけれど落雷の記述も目に付きます。激しい落雷はその発生も予防も過去から今まで防ぎようの無い自然現象であり、人命が損なわれる恐ろしいものです。東京消防庁の統計でも平成9年には7件、平成11年8月には1回の集中豪雨で8件を記録しています。また、山での作業が重要な仕事であったと思われますが、山仕事、下草刈りでいわゆる山火事を起こしたり、野火により焼死等の記述が見られます。

また、不幸にも火災で死亡した者の記述は10人に及びますが、高齢者、子供の被害者は現代にも共通する問題であり、その予防には特に関心をもって考えなければならないと思います。

- (1) 天保9年11月26日、中藤村、夜、赤堀武左衛門焼死。
- (2) 嘉永3年1月5日、東大和蔵敷村兵左衛門の子焼死。
- (3) 同年7月19日、中藤村源次郎老母いろりにてやけど死亡。
- (4) 同年12月29日、箱根ヶ崎村吉右衛門、母84歳死亡。
- (5) 嘉永5年2月2日、横田村三左衛門妻焼死。
- (6) 安政3年1月5日、横田村のいかけ師、酒に酔い酒店で焼死。
- (7) 安政3年10月2日、高木村市郎左衛門の父、いろりに落ちて火傷死亡。中風であったため、身体が自由にならなかった。
- (8) 安政5年2月10日、中藤村向坂伊之助の兄善兵衛焼死。弟の屋敷内に小屋掛け居住。
- (9) 安政6年11月28日、萩の尾源兵衛山の刈抜きに行き野火にて爛焼し死す。
- (10) 元治元年3月13日、中藤村喜左衛門、しばかり中その火で焼死。
- (11) 文久2年12月11日、梅吉妻、火傷腰より下やけど。

今でも、やけどはその治療が大変で大やけどはしばしば命取りであり、特に高齢者、乳幼児は気をつけなければならないものです。

4 主だった火災とその原因

日記に記述された火災を年月順に原因等理解し易いか、又は解釈し易いものを掲げると次のようになります。文体は出来るだけ資料に沿って表現しています。ただし、(放火)は筆者の推定です。

- (1) 飛び火により屋根から出火、天保6年1月26日。
- (2) 下屋兼收農小屋等出火、天保8年1月29日。
- (3) 三ツ木村雷火落ち麦がらに着火、天保8年6月19日。

- (4) 炭竈より火発、炭小屋焼失。弘化2年11月3日。
 - (5) 中藤村、夜、佐右衛門、蔵の戸前を火を以て焼く。(放火) 嘉永3年12月13日。
 - (6) 中藤村、夜4ツ前、佐吉西の軒下に粗朶(そだ)を積んでおいたところより燃え出けれども時間が早きゆえ人々気づき消し止める。(放火) 安政5年4月4日。
 - (7) 雷落 栗畑3畝ほど損す。安政5年6月27日。
 - (8) 中藤村、通亭老家の東軒下より火燃え立ったが消し止め。(放火) 安政6年11月12日。
 - (9) 山の刈抜きに行つて野火にて焼死。安政6年11月28日。
 - (10) 夜、5ツ時、齊藤宅の蔵と本宅の間より火起こる。(放火) 安政6年12月8日。
 - (11) 收農小屋より出火。万延元年5月12日。万延2年1月22日。
 - (12) 中藤村、夕方、山王前本家薪小屋に火を挟む者あり。(放火) 文久元年2月29日。
 - (13) 中藤村、昼4ツ時、半次郎の父三次郎隠居所焼失。文久2年7月3日。
 - (14) 三ツ木村、後ヶ谷戸新紺屋焼失。文久2年12月24日。
 - (15) 中藤村、夜、多葉粉(たばこ)屋焼失。文久3年9月6日。
 - (16) 山の刈抜けで死亡。元治元年3月13日。
 - (17) 横田村、吉祥院前の紺屋收農小屋焼失、花火作りより出火。慶応元年10月8日。
 - (18) 立川村、紙張(しちょう)の内に蚕を入れその中に火鉢を、その火紙張に燃え付き家焼失。慶応3年4月10日。
 - (19) 新座、野火留、平林寺歩兵組の放火という。慶応3年12月12日。
 - (20) 中藤村、夜、茂左衛門本宅紺屋借家いたしける裏に火を付けたれども見つけて消し止む(放火)。明治3年10月30日。
 - (21) 中藤村、上記宅再び火を掛ける裏の軒に火付け。明治3年11月5日。
 - (22) 中藤村、神明ヶ谷万蔵召捕、隣家に火を付けたる由、白状す。弘化4年7月5日。
- この様に、火災の原因はおおよそ現代にも通ずるもので、放火、花火作り、養蚕等でも火災になったことが書かれています。

5 消火活動と火災予防

日記には、隣人、村人の協力によって消し止めたことが書かれています。近代的な消防などの無

い時代ではありましたが公共危険に対して村民の協力で対処していたことがよく理解できます。

- (1) 天保6年1月26日の火災では、一旦火災が焼け鎮つたので、衆人立ち帰らんとせし時、隣家の屋根より出火。是飛火にて類焼せし。
このように、火災には多くの村人が駆け付けていたことが伺えます。
- (2) 天保8年6月19日の三ツ木村7ツ時に七左衛門庭に雷火落ちて麦がらに火燃え付きしを近隣の者走り集まり消え。
- (3) 天保14年11月24日の赤堀の火事九尺四方の家なるにより隣村は不知。
との記述。当時の農家の大きさにしては小さい家であったと理解します。
- (4) 天保15年11月4日昌蔵宅の西辻に火の番小屋を作りて番人を居らしむ。
- (5) 弘化4年2月14日中藤村戸羽本家火災、水の手配よきゆえ消し止む。
とあるが、次の日焼失しており残り火による再燃火災ではないかと推察するところです。
- (6) 嘉永元年12月14日、林蔵焼亡により村惣人足にて普請。
この日、はじめて普請のことが書かれておりその理由は不明です。
- (7) 嘉永3年12月13日、夜佐右衛門蔵の戸前を火を以て焼く、その光見ければ夜番の者見つけ盗逃去る。これより夜番を増し6人にて勤番せしむ。
- (8) 嘉永4年、夜、萩の尾の火事では、徳右衛門土蔵上屋半分焼けれども、棟より切り落とし消し止む。近代手際の消し方と美談せり。
この火災の指揮者が誰であったのか興味はつきないところであります。
- (9) 安政5年3月25日、村の夜番の者6人宛と定む。
たしか10年前の嘉永3年からの夜番6人を正式に決めたものでしょうか。
- (10) 安政5年4月4日、夜、4ツ前神明ヶ谷で火燃え出けれども時刻早き故、人々気づき消し止む。
- (11) 同、この節火難両三度あるにより、夜番10人にて寸暇なく村内を回る。
- (12) 同4月6日中藤村3組、神明ヶ谷、原山湯立神楽、火難消除為祈禱也。
当時は祈りによる信仰が何事にも行われていたので、火災もその発生を祈りにより防げると信じていたと考えられます。

- (13) 安政5年11月12日、通亭老家の東軒下より火燃え立てけれども、消し止む。
- (14) 安政6年12月9日、火事が再度起きたので不思議につき、親類相談の上内堀常覚院を頼み修羅加持をなさしむ。
- (15) 万延元年1月23日当所より焼けあと火締めしに出る。
これも信仰に基づく祈禱と見て良いでしょうか。
- (16) 文久元年2月29日、夕方山王前本家薪小屋に火を挟む者あり即時に消し止める。
これも放火と見られます。
- (17) 慶応元年8月26日、山王前収農小屋失火。本宅半分焼け消しとどむ。
- (18) 明治3年10月30日、夜、茂左衛門本宅紺屋借家いたしける裏に火を付けたれども見つけて消し止む。

- (19) 同明治3年11月5日、昨夜5ツ過再度茂左衛門裏に火を掛けたれども消し止む。

この様に多くの火災には消火ばかりでなく、事後の日待ち、加持祈禱、内清め、火事見舞い、と様々な行事が行われていることが記されている。

同じ家が再度火事に会ったこと、幾度も放火されているなど当時の村中の様子を知ることが出来ます。神社、寺の火災もよく見られます。

- (1) 天保9年12月10日、芋窪村（東大和市）石川蓮花寺焼亡。本尊、過去帳焼失。
- (2) 天保11年1月8日、矢寺村の円乗寺焼亡。本尊を焼く。
- (3) 天保15年2月5日、中藤村熊野宮地内精進堂類焼。
- (4) 嘉永5年4月1日、中藤村昼9ツ過ぎ長円寺焼失。南風により瀧の不動額堂類焼。
- (5) 元治2年2月3日、奈良橋村 雲性寺焼亡。
- (6) 慶応3年12月12日、新座野火止、平林寺焼失。
- (7) 慶応4年5月31日、飯能の騒動で三ヶ寺焼亡。市中残らず焼失。
- (8) 慶応4年10月8日、箱根鎮守宮焼失。

6 役人のかかわり

火方役人、原因と捜査については次の様な記述がみられ当時から行政の関わりを知ることが出来ます。

- (1) 天保7年11月2日、中藤村夜、4ツ萩の屋助左衛門火事、小八、文蔵、鉄五郎類焼。11月4日失火御候使、11月7日火方役人より召され八王子まで呼び出されるもの200人の由。

この記述から、当時の人口は中藤村で2,000人

位と思われますので多勢の村民を呼び出していることに驚きます。何か他の資料などで事情がわかると面白いと思いますが残念ながら詳細は不明です。

- (2) 安政2年12月10日飯能残らず焼失の火災に火事御検分ご出役。

とあり、大火における現場検証があったのであろうと考えます。

- (3) 万延2年1月22日、中藤村の4軒の火事に1月25日になって御検使来る。

との記述があります。

- (4) 文久3年12月14日、所沢から火方の召状来る。と書かれていますが、八王子と所沢の関係もこの日記だけでは良く理解できず残念です。

7 江戸の火事

指田日記は江戸の火事についてしばしば触れています。その数は17か所にのぼり、記述の月日が正確で指田日記が書かれた時期或いは、後から整理された時期があることを推察することが出来ます。東京市役所編纂「東京市史稿」などによる照合でも指田日記の記述にある発生日月は正確であります。

当時は、江戸の火事を武蔵村山から直接見ることが出来たのでしょうか。その日に正確な火災の場所までは情報が届かないと思えるのであります。しかるに江戸の火災が日記に見られることは大いに興味のあるところです。

8 まとめ

我々の祖先が暮らした江戸時代の武蔵村山においても様々な火事があり、人々が協力して生活していたことが鮮明に見て取れます。

市民の生命、身体、財産を災害から守ることは、昔から消防の仕事であり現代の社会においても益々その役割は重要になっています。昔のことから多くの教訓を学び明日の武蔵村山の為に何が必要かを考える端緒にと思い拾い読みしたものをまとめてみました。

ただ言えることは、人々の社会生活の姿の中にお互いに「いざ」と言うときの助け合いが、実によく見えたことです。良き伝統に万歳したいと思います。指田日記に出会えたことは、本当に幸せであったと今更ながら嬉しく思いますし、本稿掲載にご配慮いただいた武蔵村山市立民俗資料館の関係者の皆様にお礼申し上げます。